

教育場面における理不尽な経験¹

中山 真 (皇學館大学文学部コミュニケーション学科)

〈要旨〉 近年「ブラック校則」と称される、個人の尊厳や心身の安全・健康を損なうものや、ハラスメント行為など、一般社会から見れば明らかにおかしい学校独自のルールに注目が集まるようになった。校則以外にも、教育場面では理不尽な指導が行われているという報告がある。一方で、社会の常識に合わない校則を見直していこうとする動きもある。本研究では、まず、教育場面における理不尽な経験を収集するとともに、それによってどのような心理的影響を受けるのかについて検討する。また、理不尽な経験を仕方ないことと考える人もいる一方で、状況を変えるために何らかの行動を取る人もいる。この点について、批判的思考との関連に注目して検討する。大学生を対象に過去の教育場面での理不尽な経験の内容とその時の行動、気分(POMS)、また社会的クリティカルシンキング尺度に回答を求めた。気分と社会的クリティカルシンキングは、理不尽な状況に対する対処行動の有無で異なる部分が見られた。

〈キーワード〉 校則, 社会的クリティカルシンキング, 気分

問 題

校則とは、文部科学省(2010)の生徒指導提要によれば、学校が教育目的を実現していく過程において、児童生徒が遵守すべき学習上、生活上の規律で

1 本研究は、日本心理学会第85回大会(明星大学主催・オンライン開催)で発表した内容に加筆修正したものである。

ある。校則を定める理由として、児童生徒が心身の発達の過程にあること、学校が集団生活の場であることを挙げ、学校教育において、社会規範の遵守について適切な指導を行うことに教育的意義があるとしている。また、校則の内容としては、通学に関するもの（登下校の時間、自転車・オートバイの使用等）、校内生活に関するもの（授業時間、給食、環境美化、あいさつ等）、服装・髪型に関するもの（制服や体操着の着用、パーマ・脱色、化粧等）、所持品に関するもの（不要物、金銭等）、欠席や早退等の手続き、欠席・欠課の扱い、考査に関するもの、校外生活に関するもの（交通安全、校外での遊び、アルバイト等）などがある（文部科学省、2010）。

一方、近年、不合理な校則やルール、行き過ぎた指導が報道などによって話題となることがある。2017年には、生まれつき茶色い地毛の黒染めを強要されたとして、大阪府の高校生が府を相手に訴訟を起こした。また、これを契機として、有志による「ブラック校則をなくそう！プロジェクト」が立ち上がった。同プロジェクトによれば、ブラック校則とは、一般社会から見れば明らかにおかしい校則やルール、行き過ぎた指導などの総称である（ブラック校則をなくそう！プロジェクト、2017）。

不合理な校則やルール、行き過ぎた指導に注目が集まる中、社会環境や児童生徒の状況に合わない校則を見直す動きも見られる。岐阜県教育委員会では、2018年9月以降、毎年のように県立高校に対して、校則の見直しや公表を通知している（文部科学省、2021）。そして、このような各地域での校則見直しの取り組みを、文部科学省（2021）が各地の教育委員会等宛に事務連絡として共有している。また、認定NPO法人カタリバは、2019年から生徒主体で校則・ルールを見直す「みんなのルールメイキングプロジェクト」に取り組み、プロジェクトに賛同する学校とともに、生徒たちの校則見直しのサポートを行っている（認定特定非営利活動法人カタリバ、2021）。このような見直しの動きは近年になって見られてきた動きであり、それまで理不尽なルール・指導を受け続けてきた人たちがいる。理不尽な経験によって、どのような気分になり、その状況に対してどのような行動を取るのかについては、時代や状況、個人によって違いが生じると考えられる。

そこで本研究では、校則・ルールのみならず、教育場面（学校）での理不尽な経験について、学校種別にその特徴をテキストマイニングから明らかにする。これは、校則等の明文化されたルール以外にも、理不尽さを感じるような経験が考えられうるからである。また、校則で注目されるのは主に中学・高等学校だが、それ以外でもそのような経験は見られるのではないかと考えられるため、小学校から大学までを対象とする。さらに、理不尽な経験をした際の反応とその個人差について、探索的に検討する。具体的には、理不尽な経験をした際の気分について、社会的クリティカルシンキングとの関連を検討する。社会的クリティカルシンキング（以下、社会的CT）とは、自分とは異なる他者の存在を意識し、人間の多様性を認めながら、偏ることなく他者を理解しようとし、文脈や状況によっては譲歩することができる。そして、異なる他者や多様な価値観に対する寛容さを持つことを重視した概念（廣岡・元吉・小川・斎藤，2001）である。社会的CTの論理的側面は、柔軟的な側面と比較して、怒りなどのネガティブな気分と正の相関が強く見られるものと想定される。

方 法

調査手続き・対象者

三重県内の大学に在学する大学生 212 名を対象にオンラインで調査を実施した。そのうち、大幅な欠損のある回答を除いた 178 名（女性 97 名・男性 79 名・他 2 名、年齢 $M = 19.19 \pm 1.11$ 歳）の回答を分析対象とした。

調査内容

基本属性 年齢・性別について回答を求めた。

社会的CT志向性 磯和・南（2015）の短縮版社会的CT志向性尺度 15 項目を使用した（Appendix 1）。この尺度は「対人的柔軟性（例：たとえ意見が合わない人の話にも耳をかたむける）」「論理の重視（例：人の良い面と悪い面の両方を見る）」「脱軽信（例：何事も、少しも疑わずに信じ込まないようにする）」「真正性（例：友だちに対してでも、悪いことは悪いと指摘する）」「探究心（例：できるだけ多くの事実や証拠を調べる）」の 5 因子で構成される。「あなたは多少苦勞してでも、以下の記述のようなことがらができる人にどれくら

い『なりたい』と思いますか」という教示に対して「1. 全くなりたくない」「2. なりたくない」「3. あまりなりたくない」「4. どちらともいえない」「5. 少しなりたい」「6. なりたい」「7. 非常になりたい」の7件法で回答を求めた。

理不尽な経験 学校の中で理不尽だと感じたり、理不尽な扱いを受けたと感じたりした状況について、1つ想起し、文章で回答を求めた。その際、理不尽だと感じた理由や理不尽な状況を変えるための行動についても回答を求めた。また、理不尽だと感じた程度について、「全く理不尽ではない」を0、「非常に理不尽である」を100として、0～100の間の数値（整数）で回答を求めた。なお、学校での理不尽な経験がない回答者については、それ以外での理不尽な経験について回答を求め、本稿では分析の対象としていない。

POMS (Profile of Mood States) POMS短縮版（横山, 2005）30項目を使用した（Appendix 2）。この尺度は、緊張-不安、抑うつ-落込み、怒り-敵意、活気、疲労、混乱の6因子で構成される。「『理不尽な経験』をした際、次の項目のような気分になることがどの程度ありましたか？」という教示に対して、「1. まったくなかった」「2. なかった」「3. どちらともいえない」「4. あった」「5. 非常に多くあった」の5件法で回答を求めた。

倫理的配慮

調査実施時には、(1) 研究参加は任意であり、不参加や中断により不利益を被ることはないこと、(2) 回答は無記名で行われ、得られたデータは全体を統計的に処理するため、個人が特定されることや個人の回答が問題になることはないこと、(3) 得られたデータは研究者のみが研究目的のみで使用することを、回答サイト上に記載し、理解および同意した参加者のみが調査項目への回答を行った。

分析

統計分析にはHAD（清水, 2016）を、テキストマイニングにはKH Coder（樋口, 2004）を使用した。

評定

著者と心理学を専門とする大学教員の計2名が評定者となり、理不尽な状況を変えるための行動についての回答をもとに、「0. 理不尽な状況に対して行動

を取っていない場合（特に何もしない，耐える，回避する，関係を絶つ，謝るなど）」，「1. 理不尽な状況に対して対抗的な行動を取っている場合（抗議，第三者への相談，理不尽なルールに反する行動を取る，相手の要求を受け入れないなど）」で行動の有無の評定を行った。

結 果

理不尽な経験

理不尽だと感じた程度 理不尽な経験をした際に理不尽だと感じた程度を100点満点で回答を求めたところ， $M = 81.023 \pm 18.560$ となった。

理不尽な状況を変えるための行動 理不尽な状況を変えるための行動の有無を評定した結果，評定者間一致率は85.42%であった。不一致な箇所は合議によって統一し，行動ありが39，行動なしが56となった。

尺度構成

社会的 CT 志向性尺度 原典通りの因子構造を採用し， α 係数を算出した。その結果，「対人的柔軟性」が $\alpha = .678$ ， $M = 5.739 \pm 0.911$ ，「論理の重視」が $\alpha = .675$ ， $M = 5.679 \pm 0.941$ ，「脱軽信」が $\alpha = .775$ ， $M = 4.955 \pm 1.323$ ，「真正性」が $\alpha = .790$ ， $M = 5.737 \pm 0.960$ ，「探究心」が $\alpha = .638$ ， $M = 5.291 \pm 1.012$ であった。それぞれの項目を合計して項目数で除した平均値を尺度得点とした。

理不尽な状況を変えるための行動の有無による差異を検討したところ，対人的柔軟性において有意な差が見られ（ $t(95) = 2.169$ ， $p = .033$ ），行動を取っていない場合（ $M = 5.959 \pm 0.767$ ）の方が行動を取っている場合（ $M = 5.575 \pm 0.975$ ）よりも得点が高かった。これ以外の得点に有意差は見られなかった。

POMS 原典通りの因子構造を採用し， α 係数を算出した。その結果，「緊張 - 不安」が $\alpha = .820$ ， $M = 2.316 \pm 0.966$ ，「抑うつ - 落込み」が $\alpha = .756$ ， $M = 2.265 \pm 0.900$ ，「怒り - 敵意」が $\alpha = .718$ ， $M = 2.467 \pm 0.770$ ，「活気」が $\alpha = .818$ ， $M = 0.615 \pm 0.634$ ，「疲労」が $\alpha = .811$ ， $M = 2.699 \pm 0.888$ ，

「混乱」が $\alpha = .551$, $M = 1.989 \pm 0.710$ であった。それぞれの項目を合計して項目数で除した平均値を尺度得点とした。

理不尽な状況を変えるための行動の有無による差異を検討したところ、怒り-敵意において有意な差が見られ ($t(93) = 1.640, p = .029$)、行動を取っている場合 ($M = 13.605 \pm 3.613$) の方が行動を取っていない場合 ($M = 11.965 \pm 3.490$) よりも得点が高かった。これ以外の得点に有意差は見られなかった。

相関分析

社会的 CT 志向性と POMS の間の相関係数を算出した (Table 1)。

Table 1 各尺度得点間の相関係数

	対人的柔軟性	論理の重視	脱軽信	真正性	探求心
緊張-不安	.026	.187 *	.061	-.008	.116
抑うつ-落込み	.003	.177 *	.125	-.022	.053
怒り-敵意	-.228 **	.145	.097	-.020	-.003
活気	-.117	-.078	.084	-.149 +	-.083
疲労	-.040	.271 **	.095	-.051	-.005
混乱	.024	.190 *	.061	.008	.081

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$.

その結果、対人的柔軟性と怒り-敵意の間で負の相関 ($r = -.23$) が、論理の重視と緊張-不安、抑うつ-落込み、疲労、混乱の間で正の相関 ($r = .18 \sim .27$) が見られた。ただし、いずれも弱い相関にとどまった。

テキストマイニング

理不尽な経験を回答したテキストデータと、それを経験した学校種（小学校・中学校・高等学校・大学）の情報（外部変数）を用いて、テキストマイニングを行った。そして、抽出語リスト (Table 2)、共起ネットワーク (Figure 1)、学校種ごとの特徴語 (Table 3)、対応分析 (Figure 2) をそれぞれ出力した。

抽出語リスト (Table 2) は回答で頻出の単語を抽出したものである。「言う」という一般的な動詞に次いで、「怒る」「注意」の出現回数が多かった。

共起ネットワーク (Figure 1) は、単語が共通に出現する関係を示したもの

教育場面における理不尽な経験（中山）

である。「理不尽」という単語は、「授業」や「部活動」といった単語とともに回答されていたことがわかる。

Table 3は理不尽な経験をした学校種ごとに見られた語句を示したものである。小学校での経験の回答で特徴的な語として「担任」「怒る」、中学校では「怒る」「注意」「練習」、高校では「検査」「推薦」「部活動」、大学では「テスト」「授業」などが挙げられる。

対応分析（Figure 2）は、学校種と抽出語の関係を図にしたものである。0の原点から離れるほど、特徴を持つ語と考えられる。大学は他の学校種とは異なる位置にプロットされていることが見て取れる。

Table 2 抽出語リスト（上位を抜粋）

抽出語	出現回数
言う	59
怒る	33
注意	18
理不尽	16
悪い	13
人	13
受ける	12
子	11

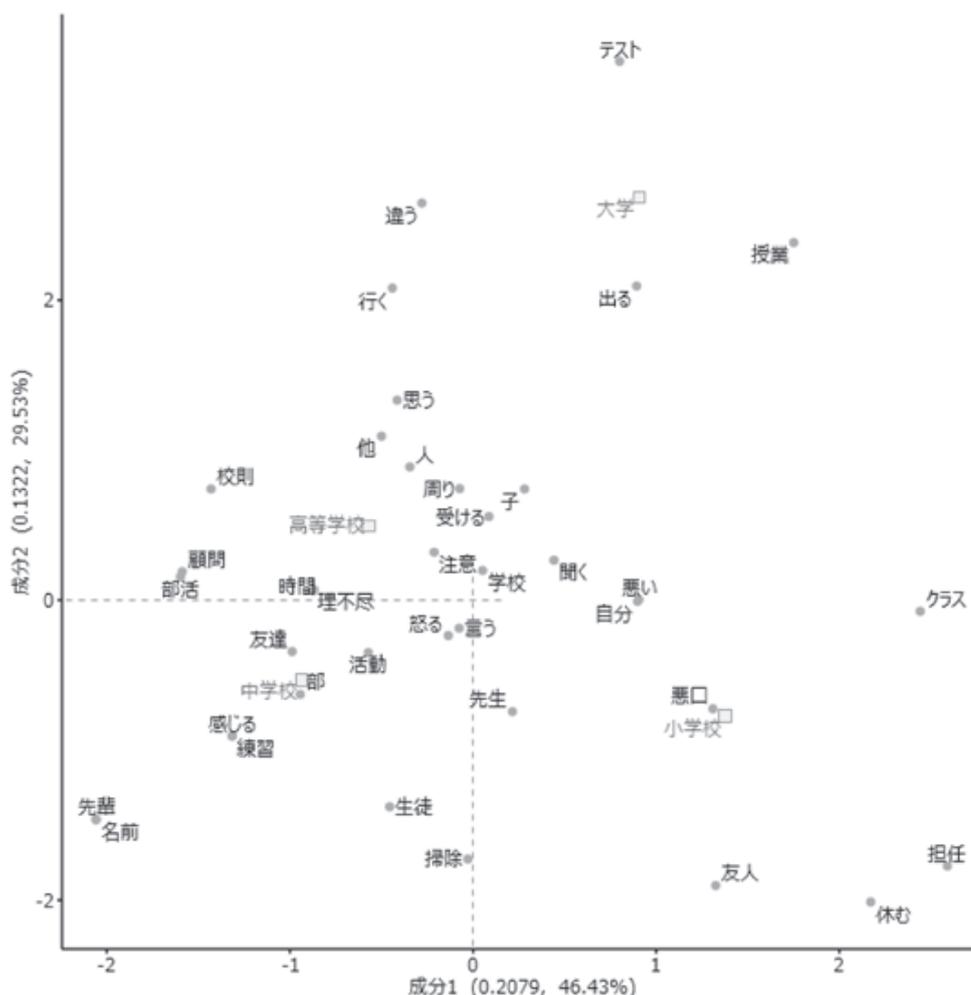


Figure 2 対応分析

考 察

本研究では、教育場面（学校）での理不尽な経験について、学校種別にその特徴をテキストマイニングから明らかにすること、また、理不尽な経験をした際の気分について、社会的クリティカルシンキングとの関連を検討することを目的とした。

相関分析

社会的 CT 志向性と POMS の間の相関係数を算出したところ、対人的柔軟性と怒り - 敵意の間で弱い負の相関が、論理の重視と緊張 - 不安、抑うつ - 落込み、疲労、混乱の間で弱い正の相関が見られた。これらのことから、他者と

の意見の相違に柔軟であるほど、理不尽な経験による怒り敵意は生じにくいと考えられる。一方、論理的（さまざまな面を見る、矛盾に気づく、エビデンスを重視する）であるほど、理不尽な経験により、ネガティブな気分になりやすいと考えられる。概ね想定通りの結果が得られた。

理不尽な状況を変える行動と社会的 CT 志向性, POMS

社会的 CT 志向性および POMS について、理不尽な状況を変えるための行動の有無による差異を検討したところ、社会的 CT 志向性では、対人的柔軟性において有意な差が見られ、行動を取っていない場合の方が行動を取っている場合よりも得点が高かった。また、POMS については、怒り - 敵意において有意な差が見られ、行動を取っている場合の方が行動を取っていない場合よりも得点が高かった。

理不尽だと感じた状況が生じた場合、それを変える行動に出るかどうかには状況による差異も考えられるが、個人差も関係しているのだろう。また、怒り - 敵意が生じるような状況の場合は、対抗する行動に繋がりやすいと言えるだろう。

テキストマイニング

回答における頻出の単語を抽出したところ、「言う」や「怒る」「注意」の出現回数が多かった。教師などから言われたこと、怒られたこと、注意を受けたことに関して理不尽に感じた回答者が多かったものと考えられる。

共起ネットワーク分析によって、単語同士の関係を示したところ、「理不尽」という単語は、「授業」や「部活動」といった単語とともに回答されていた。理不尽な経験の状況として、授業や部活動における経験が多かったと考えられる。

学校種ごとに見られた語句をまとめたところ、小学校での経験の回答では「担任」「怒る」、中学校では「怒る」「注意」「練習」、高校では「検査」「推薦」「部活動」、大学では「テスト」「授業」などが特徴的であった。小学校は担任と接する時間が多いことから担任についてのことが多く回答されたと考えられる。高校では服装や頭髪、持ち物の検査が行われる学校があること、部活動が活発

に行われる学校もあることが関係しているだろう。大学ではテストが単位修得のために重要であり、他の事柄については比較的自由であることから、テストに関して理不尽さを感じた経験が多く回答されたと考えられる。

対応分析によって、学校種と抽出語の関係を図にしたところ、大学は他の学校種とは異なる位置にプロットされていた。このことから、大学での理不尽な経験は他の学校種とは異なるものであると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、小学校～大学まで幅広い学校種での理不尽な経験を対象にして検討したことで、学校種によって理不尽さを感じる出来事の違いを明らかにすることができた。一方で、中学・高校については共通点が見られたことから、これに絞ってより詳細に検討することが必要であると考えられる。特に、部活動もしくは服装や頭髪、持ち物等の検査に関するものに言及が多かったことから、これらについて焦点を当てた研究が必要になるだろう。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

引用文献

ブラック校則をなくそう！プロジェクト（2017）．ブラック校則とは

<<http://black-kousoku.org/> ブラック校則とは />

樋口 耕一（2004）．テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—理論と方法, *19*, 101-115.

廣岡 秀一・元吉 忠寛・小川 一美・斎藤 和志（2001）．クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究(2) 三重大学教育実践総合センター紀要, *20*, 93-102.

磯和 壮太郎・南 学（2015）．短縮版社会的クリティカルシンキング志向性尺度の検討 三重大学教育学部研究紀要, 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学, *66*, 179-189.

教育場面における理不尽な経験（中山）

文部科学省（2010）．生徒指導提要

<https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm>

文部科学省（2021）．校則の見直し等に関する取組事例

<https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1414737_00004.htm>

認定特定非営利活動法人カタリバ（2021）．NPO カタリバ「みんなのルールメイキング委員会」発足！校則見直しの方針を一緒につくる、中高生メンバー募集スタート
PR TIMES

<<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000018.000060187.html>>

清水 裕士（2016）．フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育、
研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1,
59-73.

横山 和仁（2005）．POMS 短縮版手引きと事例解説 金子書房

付 記

本研究は、皇學館大学特別研究費の助成を受けて実施された。また、本研究の分析にあたって、皇學館大学文学部コミュニケーション学科の高沢佳司氏にご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

資 料

Appendix 1 社会的クリティカル・シンキング志向性尺度項目一覧

対人的柔軟性

1. たとえ意見が合わない人の話にも耳をかたむける
3. 他の人が出した優れた主張や解決案を受け入れる
7. 人の考え方にはバラエティがあるということを意識する

論理の重視

13. 人の良い面と悪い面の両方を見る
14. 人が話していることの矛盾に気づく
15. 判断をくだす際には、事実や証拠を重視する

脱軽信

5. 何事も、少しも疑わずに信じ込まないようにする
10. 情報を、少しも疑わずに信じ込まないようにする

教育場面における理不尽な経験（中山）

12. 身近な人の言うことだからといって、その内容を疑わずに信じ込まないようにする

真正性

4. 友だちに対してでも、悪いことは悪いと指摘する
6. 言わなければいけないと思えば、友だちに対しても客観的なことを言う
11. 人が間違っただけの考え方をしている時には、それを指摘する

探究心

2. できるだけ多くの事実や証拠を調べる
8. ものごとの理屈を考える
9. 他の方があきらめても、なお答えを探し求め続ける

Appendix 2 POMS 項目一覧

緊張 - 不安

1. 気がはりつめる 6. 落ち着かない 12. 不安だ 16. 緊張する 20. あれこれ心配だ

抑うつ - 落込み

7. 悲しい 11. 自分がほめられるに値しないと感じる 15. がっかりしてやる気をなくす 17. 孤独でさびしい 21. 気持ちが沈んで暗い

怒り - 敵意

2. 怒る 9. ふきげんだ 14. めいわくをかけられて困る 25. はげしく怒りを感じる 28. すぐかっとなる

活気

4. 生き生きする 8. 積極的な気分だ 10. 精力がみなぎる 27. 元気がいっぱいだ 30. 活気がわいてくる

疲労

3. ぐったりする 13. 疲れた 19. へとへとだ 22. だるい 23. うんざりだ

混乱

5. 頭が混乱する 18. 考えがまとまらない 24. とほうに暮れる 26. 物事がてきぱきできる気がする 29. どうも忘れっぽい
-

教育場面における理不尽な経験 (中山)

Unreasonable experience in schools

Makoto Nakayama (Faculty of Letters, Kogakkan University)

Abstract

In recent years, attention has been focused on school-specific rules that are clearly strange to the general public, such as those that impair individual dignity, physical and mental safety and health, and harassment acts, which are called "black school rules." In addition to school rules, there are reports that unreasonable guidance is given in educational situations. On the other hand, there is also a movement to review school rules that do not fit the common sense of society. In this study, we first collect unreasonable experiences in educational situations and examine what kind of psychological effects they have. Others think that unreasonable experiences are unavoidable, while others take some action to change the situation. This point will be examined by focusing on the relationship with critical thinking. We asked university students to answer the content of unreasonable experiences in past educational situations, their behavior, mood (POMS) , and social critical thinking scale. Mood and social critical thinking differed depending on the presence or absence of coping behavior in unreasonable situations.

key words : school rule, social critical thinking, mood